「親を殺す『ふつうの子ども』たち」を読んで

店頭の書棚で「親を殺す『ふつうの子ども』たちー『ありふれた家庭』の『ありふえれた期待』がもたらす危険性ー」の書名が目に止まり、購読した。

著者は、社会心理学の大学教授で、主に人間の攻撃性の心理的解析が専門のよう。
本書は、少年による親殺しの何年もの事件報道をデータ・ベース化し、各事件の少年の心理的解析を試みた書であった。

人間の攻撃性を専門とする著者だけに、暴力を「同胞同士が殺し合い、傷つけ合うこと」と定義し、犯罪心理学の立場から、暴力がなぜ起こるかについても、「緊張理論（ストレスが暴力を誘発）」、「下位文化理論（目的達成のための暴力肯定）」、「統制理論（暴力を抑制する力が弱まり、逸脱可能性が顕在化）」の３つの理論を紹介している。
その上で、暴力の型の「略奪型（他の個体が所有する資源を奪う）」、「防御型（自分の所有する資源を守る）」、「混合型（制裁や報復を目的）」という３つの考え方も紹介し、各事件の少年の心理を解析している。

そこから見えてきたものとして、世間的には「ありふれた家庭」の「ふつうの子ども」が親殺しに走る心理的背景には、親が子どもに良かれと思う「ありふえれた期待」の言動が子どもの自尊心を傷つけ、子どもは「居場所」と「逃げ道」をなくして自暴自棄になる心理過程に触れ、また、子どもに抑圧をかける親の心理的側面にも触れ、「ありふれた家庭」に潜む危険性を解説している。

こうしたデータ解析からの解説書に接して、通園施設の懇談会で出合ったある障害児の母親の次の言葉を思い出した。
「大学の先生の話は、統計的なことから見えて来る傾向をあれこれ話すだけで、それは一般論に過ぎないと思う。
我が子とどう具体的に日常生活で接すればいいのかの参考にはならないものが多い。
今日のように経験からの本音で話してくれた方が参考になる。」

本書の最後に、「ふつうの子ども」が親殺しに走らないようにするためには何が必要かにも触れられているが、データからの解析・解説だけに、やはり包括的な一般論の域を出ていないように感じた。

阿部幸泰　　（2009 年 12 月 30 日　記）